

---

# インスタント・ラブ～無くした恋に熱湯を～

麻栗留音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インスタント・ラブ／無くした恋に熱湯を

### 【Nコード】

N4751Y

### 【作者名】

麻栗留音

### 【あらすじ】

この内容のあらすじを考える事が果てしなくげんなりするくらいの意味不明な痴話話。カップ麺作る時間も無駄にしたいくない方はご遠慮願います。

「私達、もう終わりなの。離れた心は二度とは戻らないの。貴方が大切な人を傷付ける事が出来ちゃう人だって解っちゃった。大好きな人に傷付けられるのは辛すぎる。」

栃木と神奈川を繋ぐ電波は、銀河の果てに飛んでった女の心を、聞き慣れていた声を中折れのチッコイ電話機からプレゼントしてくれた。

「どんだけ好きだってよお、自分が辛い時は当たっちゃうって。当然だっつ。それ解ってもらわねーと男だって困るよなあ。」

栃木と東京を繋ぐ電波は、2000?の距離を数?に感じるように呆気羅として、同じ電話機からポテチのように飛び出した。

結構将来を真剣に考えた相手との散々たる破局は絶望と喪失感で僕を奈落の底へと蹴落としたが、親友の言葉のマジックで僕はなんとか気持ちの切り替えを始めるスタートラインに立つ事ができた。

巨大な喪失感という心のクレーターを埋めるには、何かにひたすらガムシヤラになる事が一番のパテだ。

だから僕は戸棚の中にあるトップバリューの「しょうゆラーメン」を本気で作ってやろうと思った。

まず戸棚の扉を開ける前にファイティングポーズからの極限まで捻れを加えたコークスクリュー・ブローを放ちつつ、拳を開いて戸を開け放ち、視界に入ったシーチキン3缶パックの右に安置された「

しょうゆラーメン」に向かつて一括する。

「貴様が親父をつ……親父をおおつ……」

この「しょうゆラーメン」は僕の親父を無惨に斬り捨てた憎むべき宿敵。左手を滑空し鍵爪を獲物に突き立てるハクトウワシのそれに变化させ、容器を掴む。僕にはこの65グラムしか麺が入っていない、カスカスの「しょうゆラーメン」が悪逆非道の限りを尽くした人斬り野武士の首に見える。討ち取ったのだ、遂に。僕は一般的なそれより感覚で軽いと解る、シンプルすぎて味気ないパツケージのそれを、ハクトウワシのそれに変えた左手で高らかと天に掲げる。僕の瞳には、左肩から上腕を経て力強くしつかりと掴まれた「しょうゆラーメン」と、端が鉛が黒くなってそろそろ寿命な蛍光灯が鮮烈に映る。きつと乱世の空もこんな景色だった。

父の敵のパツケージを包んでいる透明なビニールを、容器を逆さまにしてテーブルの上に起き、底のへこんだ部分から両手で左右にカツ捌く。サキエルのATフィールドを侵食するエヴァ初号機になったつもりで行う。バツンツ、と右と左に裂けるビニール。僕は顎をいっぱいまで開いて、初号機っぽく唸って、暴走した時に流れるBGMを自分の声で流す。僕は今、戦場にいるのだ。容器を元に戻し、フタを極限までゆっ……くりと、そろお……り、ピリ…ピリ…ピリ…と、糊をサディスティックに剥がしながら、その間「フタを開ける」事以外に雑念を捨て、目の前の目標に集中する。ピリ…ピリ…と、雪解けの始まった初春の野山と同じ速度で、その中で育まれる命の営みと全く同じ速度で、フタが開いてゆく。額から汗が吹き出して、頬を伝い、顎のラインから水滴となってテーブルに落ち、光の粒になって弾ける。それは川の成り立ちと良く似ている。幾億千年の時を掛けてマグマの台地に海が誕生したように、膨大な時間を掛けて水が台地を侵食しリアス式海岸ができたように、

フタも容器から剥がされてゆく。フタが中程まで剥がされ、中身のフライ麺とかやくとスープの小袋がその姿をこの世界に露にした時には、僕は脳の糖を全て使い果たして体重が3?減った。小刻みな震えを生じている手の力を振り絞り、まずかやくの袋を開ける。この袋を取り扱うには危険物取扱の資格がいる。かつて元が「鉄砲<sup>てつぱう</sup>」として使用したものと、構造的には同じ銀色の小袋を、「どこからでも切れます」サインに惑わされず、自分の意思で場所を決めて開封する。氾濫する情報に惑わされてはいけない。乾燥したキャベツとか色々のお粗末な具を、細心の注意を払ってフライ麺の上に配置してゆく。上手く配置しないと片寄ってお湯に浸っていなく、食べる時に「あ、少し硬い」ってなる。お湯少なめ派の僕には尚更、この作業は重要な意味を持つのだ。具の配置を終了し、間髪入れずに粉末スープの処理に入る。粉末スープの袋なんかこうやって適当にぶつちぎって麻薬のようにぶつかけちまえばいい。「えっ、スープこそ均等に振り掛けないと片寄るんじゃない?」って思った貴方は、優秀な人材だ。きっと出世する。貴方のその「気付き」は、きっと世の中に必要とされる価値を創造できる、サクセスの剣だ。僕はスープの振り掛け方にムラを付けて、味の濃い所と薄い所に溶け切らなかった粉末を任意に溶かしながら食い進めるって気持ち悪い食べ方をするから、粉末スープなんか遊びの女、もしくはカブトムシのように引き摺り回してやればいい。ただ、カブトムシは引き摺り回すと壊れるので加減が必要だ。危険物、スープ、一連の処理をぶっ続けで三日三晩寝ずに行うのが古よりの製法であるが、僕はそんなに時間を掛けて作る程暇ではないので、お湯はティファールを使って沸かす。カップ麺に使うくらいのお湯なら本当にあつという間にすぐに沸く。牛乳を入れると焦げるので注意が必要だが、馬鹿ではない人は湯沸し器で牛乳を温めようとは考えまい、だって馬鹿ではないのだから。朝露が薔薇の花弁から落ちるような時間で、水は熱湯となり、世界を変える希望となる。フライ麺と渴いたキャベツとか色々は、この煌めく希望で才能を開花させ、粉末スープという異文

化と交じり合つてルネサンスが起こる。僕は希望をまんべんなくキヤベツとかに振り掛けるように、回すように、お湯かけのプロになった気分で技術を發揮してますよ、的なモーションで注ぐ。フライ麺がギリギリ浸るくらいで止める。容器の内側の「ここまでライン」は14、5回に1回、ちゃんとライン通りにするかしないかで、逆にカリスマと異名を持つ僕には社会のルールなんて破るためにあるのだ。大人なんて嘘ばかりじゃないか、尾崎だけが僕たちを解ってくれたんだ。僕は盗んだバイクで走り出したくなるやり場の無い苛立ちを無理矢理押し込めるように、ちゃんと熱湯を注いだ証の威勢の良い湯気を、社会という不条理の監獄、日本という閉塞の箱庭、または発泡プラスチック製の容器にフタを戻して押し込める。ちゃんと熱湯で作らなかった時はこの湯気の勢いはない。今回はちゃんと作るって決めたから、ちゃんと熱湯を使って作った、だから湯気がちゃんとあがる。それでいいのだ、世界はそうやって調和を保ち、地球という星は生命の旋律を奏でている。温いお湯で無理矢理作っても食べる時に熱くなくてスムーズに麺を啜れるだけで、この「ちゃんとお湯を沸かして作り上げた」という達成感は何もない。努力は必ず報われる。逆に、努力無くしての成功など有り得ないんだ。そんな事を思いながら、僕は戻したフタの先の小さくチョココンと飛び出てる部分を容器の縁の内部に折り込み、フタの上に箸を置いて「ちゃんとフタ閉じたのにパツカリ開いてる」不慮の事故に対し二重の対策を取る。カップ麺を作る過程での想定外は許されない、原発なら尚の事だろう。一連の過酷かつ経験が物をいう工程を経て、僕はしっかりとフタで閉じられた思春期の苛立ち、そして希望の元に華開く華麗な芸術文化、それらの総称である「しょうゆラーメン」を待つ。このカップラーメンは待ち時間4分だ。たいして中身入ってないくせして4分待たせるのは生意気だ。3分以上待つカップラーメンなど普段決して買わないが、これはひとつ35円の特売で売られていたトップバリュだから、まあ、しゃあないのだ。しゃあない、しゃあない。人生はしゃあないの繰り返しだ。しゃあないと

どれだけ不条理な目に遭わされても、微笑んで呟けるようになって初めて、僕はこのフタを開ける事ができる。僕は待とう。これからの時間を、ティファールであつという間にすぐに沸いた湯水のように流れてゆく時間を、希望という名の超新星が柔らかい麵に戻るまで、安らかに待とう。そして時が来たならば、友のもとへ全生命を掛けて帰還するメロスのように、青春のクラウチングスタートで未来へ走り出そう。僕は眩しいトーヤ光の中で未来へ走る全裸の自分を想像しながら、疲弊した体に瞳をゆっくり閉じる。再び瞳が開かれる時が、「しょうゆラーメン」を食す時なのだ。そう、人はそれを、「4分後」と呼ぶだろう。それでいい。それでいいのだ…。

ほら、失恋なんて、カップ麺あれば忘れられる。命短し、恋せよ、人類！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4751y/>

---

インスタント・ラブ～無くした恋に熱湯を～

2011年11月17日18時04分発行